

## 26 怖い映画

星野博美

最近父が、DVDを借りて見るという楽しみを覚えた。姉からお下がりのDVDプレーヤーをもらい、ようやく一人で操作できるようになってきたのだ。母が外出中の時など、一人でDVDを見てくれれば、こちらとしても手間が省けるので、推奨している。

思い返せば、わが家が最初にビデオプレーヤーを購入したのは、マイケル・ジャクソンが「スリラー」のプロモーションビデオを発表したば

かりの、一九八二年の暮れだった。費用と人材を惜しみなくつぎこんだ、短編映画のようなあのビデオは、当時は画期的だったのだ。それが日本のテレビで初めて放送されるというので、なんとか録画したくて、必死に機械の操作を覚えたものだ。

それから大学に入ると、私が録画するのは、もっぱらNHKの語学講座になった。特に中国語講座とロシア語講座。あの頃は、社会主義国家の日常風景が垣間見られる番組といえ、そのくらいしかなかった。スキットの合間に登場するトロリーバスや社会主義的建築物を食い入るように見つめ、早く向こうの世界に行ってみたいと瞳をキラキラさせていた。

生活からビデオが抜け落ちたのは、日本が空前の好景気に沸いた頃だ

った。一九八八年四月に会社勤めを始めた私は、ゴールデンウィークに部屋を探し、大学時代の女友達とアパートで共同生活を始めた。そして年末に会社を辞め、年が明けると間もなく昭和天皇が崩御。ほどなくして私自身はゆるやかに写真・文筆業界に足を踏み入れ、それから長く続くことになる極貧生活の幕開けを迎えた。しかもルームメイトが彼氏と同棲するためにアパートを出ていったので、さらに安い物件を探さなければならなくなり、風呂なし生活に突入した。風呂も固定電話も諦めた。ビデオプレーヤーや電子レンジなど、夢のまた夢だった。

一九八九年は、世界にとっても大きな意味を持つ年だった。中国では天安門事件が起きて、花が開きかけていた民主化のうねりが弾圧された。欧州ではベルリンの壁が崩壊し、その勢いのままソ連の解体につながっ

ていった。それらをワンセットで記憶しているので、私からビデオを見る楽しみを奪ったのは、バブルと平成と天安門とベルリンのせいだという錯覚を時々起こしてしまう。まあ、当たらずとも遠からずではあるのだが。

まるでスペインのレコンキスタ(国土再征服)のように、長い時間をかけ、失ったものを一つずつ再獲得した。七百年要したレコンキスタよりは簡単だったが。一番早かったのは、さすがに仕事で必要だった固定電話で、一九九四年。その代わり、トイレが和式の共同になった。風呂の存在は不安定で、一九九二年に一度回復したものの、一九九八年に再喪失、二〇〇一年、九・一一の直後に再び獲得した。電子レンジを回復したのは、ぐっと時代が下って二〇〇七年だった。それもあまり気乗りが

しなかったが、「電子レンジくらいなくてどうする」と母から発破をかけられ、いやいや一万円以下のものを買った。皿がぐるぐる回るやつである。

私が低所得でうだうだ過ごしている間に、いつの間にかビデオは世間から駆逐され、DVD、あるいはネット上で動画が見られる時代になった。しかし四半世紀以上かけて習慣化してしまった「動画の不在」は思いのほか大きくて、どうしても借りる気があまり起こらない。その結果、私の映画観は一九八〇年代でストップしているのだ。

一方、長く安定した経済生活を送り（働き者だった父には、当然その権利がある）、住宅設備や家電における失地回復などせずに老後を迎え

た父は、何のてらいもなく、新しい習慣に果敢に挑戦してゆく。そのフットワークの軽さが羨ましい。早速隣のレンタルビデオショップに行き、会員証を作った。しかもその店では高齢者に向け、曜日限定で旧作が無料で借りられることを知ってしまった。借り放題である。

父が一人で楽しめる趣味を持ってくれて、よかったよかった、というのは甘い考えだった。面倒くさいのは、「次は何を借りればいいか？」としよっちゅう相談されることだ。「好きな映画を借りればいい」と突き放すが、何が好きなのか本人にもわからないのだから、タチが悪い。訳のわからない映画を借りてきては「意味がわからない」と大騒ぎし、私が忙しいか否かにかかわらず、解説しろと要求する。一緒に見せられる羽目になる。苛々して「なんでこんなにつまらない映画を借りてきた

のか」と悪態をつくると、「おまえがちゃんと相談に乗ってくれないからだ。不親切だ」と逆襲される。結局、父が新しい何かを手にするたびに私が忙しくなるといふ、いつものパターンに陥った。

対処法を考えるしかない。私が完璧に解説できる、好きな映画を薦めれば全編一緒に見る手間は省けるし、予習復習も必要ない。それがいい。

そして借りて来させたのが「マラソンマン」(一九七七年日本公開、ダスティン・ホフマン主演)だ。私の大好きなロイ・シャイダーが助演で、ナチスの残党と南米の関係、ニューヨークのダイヤモンド市場をめぐる不正資金を扱った社会派ハードボイルド作品である。ユダヤ人強制収容所で「死の天使」と恐れられたゼル役のローレンス・オリヴィエの怪演が恐ろしい。

しかしマラソンの話だと思っていた父の感想は、「全然意味がわからない。どこがマラソンなのか」と、にべもない。かたや、家事の合間につまみ見をした母は、私の解説を聞いて完璧に理解したので、作品が父には難しかったということだろう。教訓。もっとわかりやすい作品を！

次に薦めたのは、「シャイニング」(一九八〇年日本公開、ジャック・ニコルソン主演)である。教師を辞めさせられたばかりの作家志望の男が、小説を書きながら生活費を稼ぐため、妻子とともに雪で閉ざされたホテルに住み、精神を病んでいく。原作者ステイブ・キングお得意の、「ここから出られない時に人間は？」ものだ。

父の感想は、「わかった。でも怖い」の一言。教訓。あまり怖すぎない娯楽作品を！



このあたりで邦画を入れておこうと思い、次に薦めたのが「八つ墓村」(一九七七年公開、萩原健一主演)である。こうしてみると、私の好きな映画は次々と人が殺されていくものばかりだ。精神不安定だろうか。

「金田一ものは嫌いだ」と抗議されるが、「この殺戮シーンは日本映画史に残る名シーンだから、ぜひとも見ておいたほうがいい」と食い下がりに、見せた。父の感想は「話はわかった。でも気分が悪い」だった。

そして私のほうが「八つ墓村」にはまった。夜な夜な、繰り返し見続けた。

数回前にも少し触れたが、この映画のテーマはずばり、崇りだ。中国山地の山深いところにある、通称「八つ墓村」の旧家を舞台に凄惨な連

続殺人事件が起こる。村人は「崇りだ」と恐れる。崇りの起源は四百年遡った戦国時代にあった。

毛利との戦いに敗れた尼子義孝(夏八木勲)と七名の落ち武者がこの村に流れつき、百姓をして静かに暮らしていた。ところが毛利方から尼子を差し出せといわれた村人は褒賞金に目がくらみ、八人を村祭りに招き、惨殺することに合議で決めた。この殺戮シーンが名場面なのだ。

田畑を耕し、炭を焼いて百姓をする落ち武者たちだが、元はといえば戦に明け暮れた戦闘のエキスパートである。しかも山々を越え、滝を上って生き延びてきた、生存能力の極めて高い武士だ。一度戦闘スイッチが入ったら、誰も太刀打ちできない。

それを熟知する村人たちは、当然ながら卑怯な手段を採る。酒に毒を

入れて戦闘能力を封じ、集団で襲う。首に縄をかけて引きずりまわし、木にかける。死なない。鎌で頭をかち割る。死なない。火をかけて丸焦げにさせる。死なない。竹槍で一斉に突き刺す。死なない。村人はパニックに陥る。大した武器がないからこそ致命傷を与えられず、筆舌に尽くしがたい苦痛を落ち武者たちに与えてしまう。

そして絶命する寸前に尼子は、「崇って崇ってやる」と呪いの言葉を吐く。これが村人に呪いをかけることになる。夏八木勲の最高傑作である。

小学生の時にこの映画が大ヒットし、「崇りじゃ！崇りなんじゃ！」というセリフがクラスで流行ったことは前に書いた。私たちが崇りについて厳密に理解していたかどうかは疑問符がつく。ただ、身体的

に「そういうものはある」とは感じた。日本じゅうでその感覚が共有されたからこそ、この映画は大ヒットしたのだろう。

崇りには、時間と物語を共有する、イエを中心とした共同体が必要だ。ある人物を不幸な出来事が襲う。共有する物語がなければ、崇りのせいだとは誰も感じない。ところが、長い時間を共有するが故に、そのイエが「定期的に同じ類の出来事に見舞われたりする」と「発見」（本当はただの偶然かもしれないのに）した共同体の人間は、崇りという物語をいとも簡単に受け入れてしまう。実際この映画も、村人が共有する崇りを悪用した殺人事件が主題だった。

つまり共同体が崩壊し、縁もゆかりもない場所に暮らす人が増え、右隣も左隣も知らない人、という環境に暮らせば、崇りは成立しない。い

まの時代では、このような映画はあまりヒットしないだろう。私たちが恐れるのは、見ず知らずの人によって起こされる悪意のほうなのだから。逆に言えば、一九七七年当時の私を含む子どもは、ギリギリその概念を実感できる世代に属していたということに、いまとなっては驚く。

なぜ私は最近、「崇り」に惹かれるのだろうか？

中央線沿線の風呂なしアパートで、電子レンジもビデオプレーヤーもない暮らしをしていた頃は、そんなことは考えもしなかった。共同体にまったく属さない、孤独な生活をしていたからだ。

「崇り」との距離感が縮まったのは、四半世紀に及ぶ放蕩生活を経て、自分自身が故郷、あるいはイエに戻ったからだだろうと思う。「崇りの通る世界へようこそ！」なのだ。

「八つ墓村」のあと、父はぱったりDVDを借りに行かなくなった。理由を尋ねたところ、こんな答えが返ってきた。

「おまえに相談すると、怖いものばかり見せられるから」  
意図したわけではないのだが、八つ墓村効果は絶大だった。